
light here

JIN.KURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

light here

【Nコード】

N0702A

【作者名】

JIN・KURA

【あらすじ】

主人公が最愛の彼女に出逢うまでのストーリーで学生時代に出逢った仲間、育男の自分の愛し方を見て、主人公は感銘を受ける。育男は脳死の彼女との仮結婚を果たし、彼女は死ぬ。それから8年くらしい時が経ち、主人公も育男の人の愛し方が分かり、彼女をつくる。車椅子の彼女

パート1

あなたはもう、運命の出会いを経験しましたか？

その人がこの世の中で、あなたにとって1番大切な人だと言い切れますか、？

どこかで妥協しなければ、恋愛なんて、出来ないものなのかもしれないですね。

僕もそう思っていました、彼と、彼女に遭うまでは、

僕の名前は雪広、都内で介護士をしている、歳は28。

これから僕が若い頃に経験した、出来事について、話をして行きます。

僕は実家のある、山形県で、ごく普通の高校を卒業して、すぐに上京、都内にある、介護の専門学校へ進学したんだ。

東京に憧れとか、そういうのを持つタイプじゃない。

僕は東京に出て来たい訳じゃ無かった。

僕の住んでいる山形には

介護の専門学校が無かったから出て来ただけ（笑）
だから専門学校を卒業したら、すぐに実家に戻り、就職しようと思っただ。

まあ、でも、僕は介護士を目指すのには理由があっただ。

小学生の頃、僕の家には寝たきりになってたおばあちゃんがいた。僕はおばあちゃんが好きだった。

けどね、トイレに連れて行ったり、体を拭いたり、当時はなんで僕がやらないといけないの？

親がやればいいのに、っていつも不満顔してた。そんな僕におばあちゃんはいつも

「ありがとう」

と笑顔を見せてくれてた。

おばあちゃんは僕が中学に上がる前に、亡くなった。

僕はこの時、凄く後悔したんだ。

もつとおばあちゃんになにかしてあげたんじゃないか？

自分がすごく惨めな、心の狭い人間に思えた。

まあそんなのが、僕が福祉の道を選んだキツカケだった。

上京してからの福祉の学校は刺激的だった。

僕は生真面目な性格なのもあって、

すぐに福祉の世界にハマって行った、学校から学ぶ事は凄く多かった。

それに、一緒に学んでいる人も実に多種多様で、みんなそれぞれの目標を持って、いい刺激を受けた。

その中でも僕が在学中に1番仲良かったのは田村育男君、とびきり明るくて前向きな青年だ。

彼は僕から見て、学校で1番勉強熱心だったし、優しかったし、よく僕を笑わせてくれた。

彼のおかげで、何度助けられたことが、その頃、僕がクラスメイトに告白して失恋した時も、毎日、彼の側にいて、泣いてたくらい（笑）

まあ、でもそれは学校が始まって半年くらいの話で、しばらく一緒にいると、いろいろと分かってくる。

育男の明るさは、なんか、空元気に見えたり、たまにすごい切ない表情をしたり、

学校が始まってから、時間が経つにつれ、僕は彼が見せる、心の闇を心配するようになった、

そして、育男と一緒に学んだり、遊んだりする様になって、1年、僕は彼を飲みに連れて行き、

彼が抱える事情をようやく知る事になる、

育男は僕の心配する様子に前から気づいていたみたいで、

いつもより沢山のお酒を飲んで、僕にすべてを話してくれたんだ、

話を聞いて、僕は涙が止まらなくなったのを覚えてるよ、育男はこう言っただ。

「僕にはずっと愛する女性がいる、高校の頃からずっと付き合っ

ていて、結婚の約束をするほど、

僕にとって、大切な人なんだ。もちろん今でも、結婚したい気持ちに変わりは無いよ、、、

けどね、、、彼女はもう、、3年もの間、ずっと病院にいるんだ、、

彼女にはもう、、考える力が無いんだ、、脳がね、、死んでるんだよ、、

未だに信じられないんだ、、事故に遭った数時間前まで、元気に僕と会ってたんだよ?、、

それが、、僕と別れた後に交通事故に遭って、、次に僕が会った時には、、もう、病室で、、見た目には、

ほとんど怪我もしてないんだよ!?!なのに、、

育男は高ぶった口調で、泣きながら、、僕に話しを続ける、、

僕はこの時、、彼に掛けてあげるべき言葉が、、見当たらなかった、、

育男は俺なんかが経験した事のない、大恋愛をしてる、、重大なものを背負ってる。

僕には育男が今までより、、ずっと、大人に思えたし、だから、色々な慰めなんか出来なかった。

しばらくして、、育男は僕の目をしっかりと見つめ、こう言った、、

「俺、彼女と結婚しようと思ってる、、

2度と意識は戻らないのは分かってるし、医者の話ではあと、2、3年で心臓も停止するだろうって。

結婚なんて意味無いのかも知れない。

彼女の親にも反対されてる、、けど、、

俺の中では、2度と出会えない、最高の彼女なんだ、、

俺は彼女が死んでも、、彼女以外の女性を愛する事は出来ない、、

今だから言ってんじゃない。これから先ずっと。

だから、誰がなんと言おうと、

俺は彼女と籍を入れる、ユキヒロ、力になってくれ！」

育男はそう言つと、カバンから、すでに自分の名前が記入されている、婚姻届を僕に見せてくれた。

しかし、彼女の名前は書いていない、彼女は字を書く事が出来ない。

代理記入は出来るんだろうか？

そもそも、この2人の結婚は法律で認められるんだろうか？

僕は少しでも育男の役に立つて上げたかった。僕に出来る事は話しを聞いてやる事じゃない。行動だ。

次の日から、僕はこの2人の結婚を成立させるために、育男と協力し、様々な事を

調べ始めた。

育男の願いを叶えてやるために、

パート2

僕は様々な本や資料を読んだ、市役所にも行った、そして分かった事、

国は、法律は結婚を認めていない、

正確には本人同士の意味があれば、結婚はできるそうだけど、その確認が取れない状態で

の結婚は認められない、つまり、育男と彼女の結婚は不可能だ、

僕は何度も市役所の担当者と話した、サインと、捺印は代理の人が押してもいい、

ただ、婚姻届けを受理する際、本人同士の現在の状況、そして、結婚するという意思の確認は

必ずするもので、脳死の状態での結婚はなにをどうしても無理だった、

僕は市役所の担当者に怒鳴ったり、インチキでもいいから結婚を認めてくれ！

と、無茶苦茶言ったが、答えはNO。

市役所の担当者はすぐく親身になって話を聞いてくれたし、誰が悪い訳でもない、

俺等みたいなちっけな奴の叫びでは法律は変えられない、

僕は1週間奮闘して、育男と彼女の親御さん（両親）に、育男の家で会い、この事を告げた、

育男は無言だった、しばらくして、

彼女の親御さんが

「育男君、いろいろありがとう、私達はね、育男君に感謝して

る、

毎日、病院に来てくれて、ここまでしてくれてもう、娘は幸せだから、娘の事は忘れていいから、

、育男君は育男君の幸せを考えて！」

僕はうつむいたまま、黙ってるしか無かった、けど、僕もこの時、育男は頑張った、

もういいんじゃないか、という気持ちだった。

けど、育男は違った、

育男はしばらく、無言だったが、ポケットから1つ、ケースを取り出し、テーブルの上に置いた。

指輪だった。

育男は沈痛な表情で喋る、

「僕の幸せは、、僕しか分かりません。僕はこの先の人生も、彼女を好きでいたい。

国が認めてくれないなら、それでいいです、けど、俺は彼女と結婚します。

明日、俺、病室行って、指輪渡すんで、親御さん、立ち会いお願いします」

育男の強い眼差しと言葉に、俺も親御さんも、もうなにも言えなかった、

そして翌日、、

今日は育男にとって人生で最も大事な日。

僕は朝起きて、まず教会に向かう、

国が、法律が認めてなくても、神父さんに、誓いの言葉を言わして

やりたい、

事情は全部話した、神父さんはね、これは例外だという事を僕に何度も前置きした上で、、
了解してくれた！！内緒だけど、

13：00頃、今度は彼女の親御さんと合流、病院に事情を説明する、

担当医はなにも言わず、僕の説明を聞く、

親御さんもお願ひしてくれた。

なかなか認めてくれなかったけど、担当医の方は最後に

「いい結婚式になるといいですね、私も参加して宜しいでしょうか？」

と、言ってくれた。なんかメチャクチャ感動した。

僕に出来る準備は整った、

後は、20：00からの式を待つだけだ、

19：00 特別治療室はこの日だけは違う装いだ。

育男の両親、彼女の両親、担当医と他の先生方5名、それに、僕と神父さん、

みんなそれぞれ複雑な思いだった、彼女のためというより、これは育男のため、

育男が彼女を一生愛する誓いのための結婚式、みんながこれでいいんだろうか？

と言う気持ちをもっていたと思う。けど、今日だけは、彼女が脳死の状態になってから始めて、

彼女の両親の笑顔がみれた、そんなところにこの結婚の意味が少しだけけど、ある気がした。

20:00 育男が病室に来た、

紹介のナレーションも華やかなセレモニーもなにも無い。けど、育男はタキシードを身につけ、

皆に一礼し、晴れやかな表情で彼女の元まで歩く、
僕はこの段階でもう、涙が止まらなかった、

「なんじ、田村育男、あなたはさつきを妻とし、生涯かわることなく、愛する事を誓いますか」

育男は誓った。

彼女にも同様の誓いの文章が読まれる、

彼女からの返答は無い、

彼女に指輪をはめる、

彼女の両親が彼女に掛けてあったブーケをめくり、彼女は顔を見せる、呼吸器は付けたままだ、
指を育男の前に運ぶ、もう病室にいたすべての人が涙を流してた、

育男は呼吸器を付けたままの彼女に、そつとくちずけした、

これはドラマなんかじゃない、奇跡なんかない、彼女の意識は戻らないままだ。

そんな事は百も承知だ、

式は終わった、
彼女はそのまま、
集中治療室に戻って行った、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702a/>

light here

2010年10月17日15時25分発行